

二〇一一年九月二〇日(参加者一四名)

インターネット句会隆盛子規忌来る	菜々
秋灯下絵本の部屋にあそびけり	"
湖畔道なぞへは葛の花襖	"
女の子らに蹴飛ばされたる虚栗	"
キッチンが主婦の書齋や獺祭忌	"
爽やかや池に張り出す回り廊	"
過疎の村降ってきそうな星月夜	百合
虫の音も馳走と思ふ山の宿	"
秋愁ふ車内で化粧仕上げる娘	"
秋疾風回転ドアに吸ひこまれ	"
離されて幼の歩む花野かな	"
霧襖晴れて展けし千枚田	宏虎
殉教の島に燃えゐる曼珠沙華	"
似て似ざる五百羅漢の秋思顔	"
山門へ誘ふ左右の萩の波	ひかり
茶祖の碑に添ふ椿の実太りけり	"
境内のところせましと彼岸花	"
虫の声極楽橋のあちこちに	せいじ

竹林の入口はここ彼岸花	"
近隣に独居人増ゆ敬老日	有香
異な楽は外来種かも虫すだく	"
柿の実の落ちて散らばる獺祭忌	よし子
職辞してよりの晩学秋灯し	"
雁渡し古井戸しつかと蓋を閉じ	きづな
名の庭に絶えぬ水音初紅葉	"
校庭にそろふ笛の音秋高し	満天
ポロニーヤ展出て童心や秋うらら	"
山裾に引く棚雲の生絹とも	はく子
逆縁の愚痴も洩らして墓洗ふ	"

定例句会みのる選

二〇一一年九月二〇日(参加者一四名)